

乳児期における前言語的

コミュニケーションの発達 (I)

Development of pre-verbal communication in infancy (I)

大 薮 泰
Yasushi Ohyabu

人間の生きている世界というものを大きく分けてみますと、一つは「もの」の世界 あります。「もの」と人間とのかかわりということが当然あるわけです。それから、この「もの」の世界と対照的な世界があります。それは、「ひと」の世界ですね。「もの」の世界と「ひと」の世界という大きな二つの世界、その中で人間は生きているということが言えるように思います。それから、もう一つ、今度は人間の心のほうのことを考えてみますと、知的な世界があります。そして、もう一方に、情的な世界があると思います。

言葉というのは、これら「もの」と「ひと」、「知」と「情」という4つの条件がうまく絡み合っただけ機能したときに、スムーズな形で出現してくるのではないかと考えられます。

「もの」の世界だけに行ってしまうというのは、非常に困るわけです。たとえば、この「もの」の世界に埋没している障害児、それが自閉症の子どもたちといえます。この子どもたちは、もうほんとうに「もの」の世界にとらわれてしまっている。「ひと」との世界が非常に乏しい子どもたちです。そして、知的にも情的にも遅れています。

逆に、「ひと」との関係に非常にとらわれてしまっているタイプの子どもたちもいます。それが情緒的な障害でことばの発達が阻害された子どもたちです。「ひと」とのネガティブな関係に由来する、心の不安定さが言葉の出現を抑制することがあるのです。

また、「ひと」との密接な関係が奪い去られた環境の中で生活した結果、言葉が非常に遅れる子どもたちもいます。たとえば、養育環境が劣悪な

施設で育てられた子ども、ホスピタリズムの子どもたちがそうです。最近では、一般の家庭で育てられた子どもたちの中にも、そうした症状をとる子どもたちがいて、家庭内ホスピタリズムと呼ばれることがあります。

さらに、生まれつき知的にも情的にも遅れた子どもたちもいます。いわゆる、精神薄弱の子どもたちです。この子どもたちの場合も、言葉の発達は当然遅れることとなります。

こんなふうに考えてみますと、「ひと」と「もの」、「知」と「情」という4つの条件がうまく結びつかないと、言葉というものは発生しにくいということが考えられるわけです。

1. 話し言葉の三角形モデル

話しことばを使ったコミュニケーションを簡単に表わしますと、次のような図で表わすことができます。(図1)。この図を、ここでは「話しことばの三角形モデル」と呼んでみようと思います。

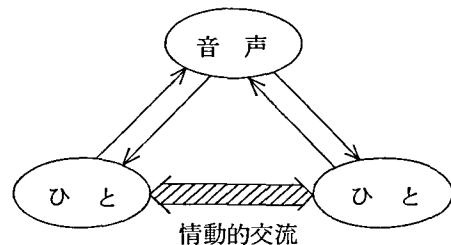


図1 話し言葉の三角形モデル
(←意味づけられた記号)

※ 本稿は、1989年11月11日(土)に長野大学情報システム研究所で開催された「長野県言語障害児学級担任者会」の研修会での講演を文章化したものである。

私たちは音声を使って、お互いに理解しあっている。ある人がある音声に意味づけをする。そして、他の人が、その意味づけられた音声を理解する。こうした意味づけられた音声を、相互に発し、理解しあう。これが、話しことばを使ったコミュニケーションの基本的な姿であろうと思います。そして、同時に、人と人との間に成り立つコミュニケーションには、「情動的交流」というものが存在するのが特徴です。それは、同じ感動の中に溶け合う、響き合う、共鳴し合う、あるいは響存するといった表現ができる状況です。そういう関係が「ひと」と「ひと」との関係であつて、この関係は、「ひと」と「もの」との関係にはありません。こうした関係を、「話しことばの三角形モデル」と名づけてみたわけです。

次に、コミュニケーションとは一体何かということ考えた場合、それは、お互いの間に共通したものを、共通した世界を作り出すはたらきだということができます。共通したものを見ようとする、共通したものを聞こうとする、お互いが同じ世界を理解しあおうとする、それがコミュニケーションの最も基本的なことだと思います。ですから、そうしたことが可能になるためには、それぞれのパートナーが、お互いに共通したものを持ちあう、共有しあうような能力があることが必要になるわけです。そうした能力の最も低次のもの、それが、お互いにある共通の対象に注意する、つまり「共同注意」の能力ではないかと思っています。

そして、「情動的交流」あるいは「共同注意」をしながら、「役割交替」をしあう。相手に、一方的に情報を流すのではなく、お互いに情報の発信や受信を交替する。これも、コミュニケーションには欠かせない条件であろうと思います。

つまり、コミュニケーションの基盤として「情動的交流」、「共同注意」、「役割交替」の3条件は最低限必要になるのではないかと、そのように考えられます。

ところで、言葉に遅れのある子どもたち、特に自閉症といわれる子どもたちの場合には、「ひと」との関係づくりが非常に難しい。なぜなら、その子たちとの間では、「情動的交流」も「共同注意」も「役割交替」も希薄になるからです。こうした

3つの条件に欠ける場合には、お互いの意図が伝わらないもどかしさをほんとうに強く感じるようになります。

ですから、ことばという象徴的な記号が誕生するためには、こうした条件が基盤にあるのではないかと思うのです。記号には、信号とか標識といわれるものと、象徴的記号といわれるものまであります。言葉は、象徴的記号ですが、これは、意味するもの（能記）と意味されるもの（所記）とが、非常に分化しています。たとえば、ここにマイクがありますが、このマイクという物理的性質と用途をもつ物体と、「マイク」という音声とは本来まったく無関係な性質をもったものであったはずで、つまり、マイクそれ自体と「マイク」という音声とは、非常に異なる性質をもっているのです。そこで、マイクを現実の世界にあるものとすれば、「マイク」という言葉は、仮の世界、虚構の世界のものということができるともできません。こういう意味で、私たちは、現実の世界と虚構の世界という二重の世界に生きているということができるともできます。

それでは、こうした虚構の世界、言葉の世界はどのようなプロセスをたどって獲得されるのでしょうか。「話しことばの三角形モデル」は、どのように完成されてくるのでしょうか。こうしたことを考える手始めに、言葉を話し始める前の乳児期に、コミュニケーションの基盤としてあげた、「情動的交流」「共同注意」「役割交替」がどのような形態を取って現われてくるのかということを見ておきたいと思います。その際、「人指向性」ということと「伴起性」ということが大切になってきますので、今あげた3つのことを、この「人指向性」と「伴起性」という観点から考えていくことにいたします。

2. 人指向性ということ

赤ちゃんというのは、ある特定の感覚パターンに注意を向けようとする、生まれつきの強い性質をもって誕生してきます。そういうように仕組まれて生まれてくるわけです。そこで、次に、視覚と聴覚について、「人指向性」を示すと考えられる特徴を紹介してみたいと思います。

(1) 視覚について

視覚の場合、注意を向けやすい対象には、いくつかの特徴があることが知られています。

最初に、コントラストがあげられます。明暗のコントラストがはっきりしているものと、はっきりしていないものとを、赤ちゃんがよく見える距離、ちょうど30センチ程の所に同時に見せます。すると、赤ちゃんはコントラストが明瞭なものの方を、長い時間見つめます。

それから、色と図柄とを比較しますと、赤ちゃんは図柄の方を好んで、長い時間見つめます。色の中では、赤や青は比較的長く注視するのですが、こうした色よりは、白黒でも図柄、パターンのある模様の方を好むのです。

それでは、図柄の中では、どういうパターンを好むのでしょうか。一番特徴的なことは、直線でできているものと、曲線でできているものとを比較すると、これは圧倒的に曲線でできているものの方を長く見ます。それから、赤ちゃんが未熟であればあるほど、情報処理能力は未熟ですから、あまり複雑で細かなものは見ませんね。ですから、その赤ちゃんにふさわしい情報をもっているもの、複雑なものを見るという特徴もあるわけです。そして、もう一つありますのは、図柄が少しずつ変化するものです。いつも同じパターンではなくて、変化するものの方を長い間注目するわけです。やはり、赤ちゃんでも、同じままで変化がなければ、すぐに飽きてしまうことになるのでしょう。

赤ちゃんのこのような視覚特徴を見てきますと、こういう条件にピッタリ合致するもので、常に赤ちゃんの身近にあるもの、それは人間の顔であることに気がつきます。人間の顔は、こういう条件に非常に合致する刺激パターンを持っています。

たとえば、一番最初に、コントラストということをお話し致しましたが、新生児期の赤ちゃんが人間の顔のどこを注目するかと申しますと、顔の輪郭の部分です。髪の毛の生え際だとか顎のあたりの、コントラストがはっきりした部分です。やがて、生後2カ月頃になりますと、赤ちゃんの視線がお母さんの顔の周辺部から中心部に移ってきますが、このとき赤ちゃんが一番視線を向けやすいのがお母さんの目です。目は、顔の中では最もコントラストがはっきりした部分です。

次に、赤ちゃんは直線より曲線の方が好きだと申しました。これも、人間の顔は直線よりも曲線でできているとってよいでしょう。今も申しましたように、赤ちゃんは目を非常によく見ますが、これは典型的な曲線です。鼻も口も耳も顔の輪郭も、全体としてみると曲線でできているとってよいでしょう。

そして、おそらく人間の顔は、赤ちゃんの情報処理の能力にふさわしい複雑さをもっているためであり、同時、適度な変化も常に伴われていると考えられるのです。

ですから、赤ちゃんが生まれつき持っているこうした視覚特徴は、「ひと」との関係を作っていくうえで大切な特徴だといえるわけです。もし、こういう視覚特徴を赤ちゃんが持っておりませんと、これはもう大変なことになってしまいます。「ひと」よりも「もの」の方が好きだという赤ちゃん、これは困ります。いくらお母さんが世話をしても、近くにある障子が好きだとか、タンスのほうに魅力を感じる赤ちゃんでは困るわけです。でも、こうした「もの」のほうに注意が引かれやすいという赤ちゃんが、全くいないとはいえません。そして、そうした赤ちゃんの場合には、おそらく人間的な交流が非常に困難になると考えられます。

(2) 聴覚について

エンTRAINMENT (entrainment) という現象をご存知ですか。日本語で言いますと、同期行動と訳されています。これは、目覚めている新生児に言葉かけをすると、その言葉かけに対応して、新生児の四肢が同期的に動く現象のことをいいます。こういう同期的な行動は、人間の話しかけ以外の音、たとえば、コンピューターで合成した雑音、拍手、周囲の物音などに対しては生じてこないのです。

これは、一番最初に申しました「ひと」と「ひと」との響き合い、共鳴といった現象が、新生児期という時期にすでに出現することを示しています。「ひと」から言葉が聞こえてきますと、それが、赤ちゃんの身体の動きとして現われてくるのだと考えられます。

実は、こうしたエンTRAINMENTの現象は、

私たち大人同士の会話にも顕著に見られる現象なのです。お互いに話しをしますと、聞き手のほうがうなずく動作をすることに気がつきます。この聞き手のうなずきの動作と、話し手の音声との同期行動は、新生児期のエントレインメントと非常に類似しているのです。たとえば、精神分裂病の患者さんと会話すると気がつきますが、非常に話しくいいですね。その一つの原因は普通の人間同士の間に見られる同期的な行動が乏しいからと考えられます。会話の内容以前に、こうしたコミュニケーションのリズムの不調が原因としてあるわけです。ですから、成人のコミュニケーション形態の本質的な特徴が、すでに新生児期に存在することが示唆されるといえるのです。

次に、赤ちゃんは言語音をいつ頃から、私たちと同じように聞き分けるようになるのだろうかという問題があります。たとえば、[a] という音や [i] という音がありますが、赤ちゃんは、初めからこれらの音を私たちが聞いているように聞き分けているのか。それとも、最初は、話たちのように分類はできないで、段々に私たちと同じような音の分類能力を獲得していくのだろうかという問題です。これは、話しことばの獲得にとって非常に重要な問題です。

[b] 音と [p] 音という物理的特徴が非常によく類似した音を考えてみましょう。私たちは、音の周波数分析により、ここからここまでの音は [b] 音、そこから先は [p] 音というように、ある点でこの両音を聞き分けていることが知られています。この聞き分ける点が、人によって異なっていれば、困ることになります。ある人は、それを [ba] と聞き、別の人は [pa] と聞くようであれば困るわけです。

さて、赤ちゃんにはサッキングという行動が生まれつき備っています。乳首をくわえさせると、赤ちゃんは自動的にそれを吸い始めます。そして、その時、同時に音を聞かせますと、サッキング率が增加することが知られています。しかし、同じ音を聞かせ続けると、その音に慣れ、やがてサッキング率が下がり始めるのです。

そこで、サッキング中の乳児に [b] 音を聞かせます。すると、サッキングの率は増加します。

ピークを過ぎた時点で、[p] 音に変えるとサッキング率はどうなるか。もし、[b] 音と [p] 音が同じ音だと赤ちゃんが判断すれば、サッキング率は低下し続けるはずですが、逆に、違う音だと判断すれば、新しい音が聞こえるわけですから、サッキング率は再び増加し始めることとなります。で、どちらであったかといいますと、生後1カ月の赤ちゃんですら後者であったわけです。つまり、サッキングは増加したのです。そして、この両者を聞き分ける点は、私たちと同じ点であることも確認されているのです。ですから、乳児は生来的に言語音に対して、非常にすぐれた聞き分け能力をもっているということがいえるわけです。

最後に、聴覚刺激と赤ちゃんの微笑行動について取り上げておきたいと思います。赤ちゃんの微笑行動には、3種類のものがあります。一つは、眠っているときに自然に生じるものです。この微笑を自発的的微笑といいます。この微笑は、睡眠中でもREM睡眠といわれる時期に出現するものです。それから、誘発微笑があります。この微笑は、やはりREM睡眠期と、睡眠と覚醒のちょうど中間にある「まどろみ」の時期、それも覚醒から睡眠に移行する「まどろみ」のときに、音刺激に反応して出現する微笑です。そして、この誘発微笑の出現から2週ほど遅れ、生後2週ほどになると、社会的微笑が出現し始めます。この微笑は、覚醒時に人間の刺激に反応して出てくる微笑です。誘発微笑も社会的微笑も外界からの刺激によって生じるところが共通していますが、もう一つの共通点は、いずれも人間の音声によって最もよく出現するという点です。

人間の微笑には、発達につれて、喜び、侮蔑、怒り、恐れなど、非常に多くの意味が付与されるようになりますが、一番最初の微笑がもつ感情は、やはり「快」ではないかと思えます。快いという感情が、表出行動として表現されるとき、微笑という行動形態を取るように仕組みられているのではないかと、そう考えるわけです。もし、そういうふうに仮定しますと、赤ちゃんに微笑をもたらす話し言葉というものは、赤ちゃんにとって最初から非常に快い特徴を持つものだろうと推測できるわけです。

これまで、赤ちゃんが持つ視覚と聴覚の特徴をいくつか紹介してきました。こうした特徴を集約しますと、赤ちゃんは人間が持っている刺激に対して敏感に反応し、その後の「ひと」との関係をよりスムーズに進展させやすい形で機能しているということができましょ。その意味で、人間の赤ちゃんは非常に強い「人指向性」を生来的に有しているということができるとのことです。そして、人間の赤ちゃんと「ひと」との関係は、最初から、響き合う関係とでも表現できるような場といえるようなものであり、それは「もの」との関係と大きく異なる関係であるといえるのではないかと思うのです。

3. 伴起性ということ

私たちは、「ひと」と「もの」に取り巻かれて生活をしています。その中でどういうことが大切かと言いますと、そういう世界に生きていることが楽しいんだということ、これがないと生きる意欲、いろいろな能力というものがうまく育っていかない。それでは、赤ちゃんにとって楽しい環境とは一体どういう特徴を持った環境なのだろうか。楽しいという感情自体が、まだ未分化なものなのかもしれませんが、赤ちゃんにとってどんな環境が快い魅力的な環境なのかということです。

どういうものに対して赤ちゃんの注意が引きつけられやすいかと言いますと、それは「伴起的」に動くものです。伴起とはどういうことかと言いますと、自分の行動が原因になって、すぐさまそこに環境の変化が生じることを指しています。伴起する、つまり自分の行動に伴って生起する、外界に変化が起こる、そういうものに赤ちゃんは気がつきやすいのです。

たとえば、新生児にテレビの画面を見せます。そして乳首を特定のサッキング率で吸うと、画面がハッキリ見えるようにしておきます。それ以外のサッキング率の場合には、画面がボケてくる。そういう装置を作ってやりますと、赤ちゃんはすぐにハッキリ見えるときのサッキング率を覚えてしまいます。そして、ハッキリ見える画面を見るようになるのです。

あるいは、頭を右側に回すと、ライトがつく、

という場面設定をしますと、これも赤ちゃんはすぐに覚えて、頭を右側に回してライトをつけるようになります。その段階で、今度は、左側に回さなければつかなないようにしますと、またすぐ左側を見るようになります。左側を見てから、右側を見ないといけないようにすると、これもやがて覚えてしまいます。

つまり、赤ちゃんは、自分の行動に伴起して変化する環境に非常に敏感であることがわかります。あるいは、そういう自分と環境との伴起的な対応関係を常に探索しているということがいえるのです。そして、ライトがつくと、赤ちゃんがニコリ笑うということもあります。逆に、自分の行動と全く無関係に動く環境には気づきにくく、そうした環境は赤ちゃんにとって面白味のない、そして感動させられることのない、無味乾燥した世界だといえるでしょう。

それでは、同じ「伴起的関係」でも、「ひと」との伴起的関係と「もの」との伴起的関係とは違いがあるのでしょうか。そのことを、次に考えておきたいと思います。

(1) 伴起的变化を引き起こす手段の豊かさ

最初に、伴起的な変化を引き起こす手段というもの考えた場合、「ひと」に対する手段は多くあるのに、「もの」に対する手段は非常に限定されていることに気がつきます。

まず、身の回りにある「もの」との関係を考えてみます。すると、伴起的な関係を引き起こすのに有効な手段は、赤ちゃんの手に限られてしまいます。手でそれに触らない限り、「もの」は動きません。最近、音に反応して、身をくねらす花の玩具が売られていますが、手で動かすということが「もの」との関係の原則です。ですから、「もの」との関係を作ろうとしますと、こちらが「もの」のところまで出かけていかなければなりません。手を伸ばさなければならぬのです。

ところが、「ひと」を相手にする場合、手で「ひと」に触れば「ひと」はもちろん反応しますが、それ以外に、赤ちゃんの表情や身振り、そして声や視線に対しても「ひと」は伴起的に応答するわけです。赤ちゃんが、わざわざ「ひと」のところまで出かけて行く必要はありません。赤ちゃん

んと「ひと」とが共在し響き合う空間が、伴起的な関係を生じさせる場を用意しているといえることができるのです。そういう意味では、「ひと」と「もの」との間にある対立的な関係が、「ひと」と「ひと」との間には非常に希薄になるのです。

そうであるがゆえに、赤ちゃんが出しているシグナルに敏感なお母さんと鈍感なお母さん、あるいはそういうシグナルに全く応答しないお母さんとを比較すると、大きな違いが出てくることになるわけです。ところが、伴起的に応答する玩具が身近にない場合は論外にして、そういう玩具の場合には、それが身近にありさえすれば、赤ちゃんからはたらしきかけに対して常に決まったパターンで応答できるのです。いやむしろ、決まったパターンでしか応答できないといったほうが良いのでしょうか。

(2) 伴起的応答の豊かさ

今度は、伴起的に応答する側のほうのことを考えてみましょう。つまり、「ひと」と「もの」のほうのことです。これも、「ひと」と「もの」とを較べてみると、応答は「ひと」のほうが非常に豊かです。「もの」の場合には、機械的な応答しか返ってきません。こちらからはたらしきかけに対して、同じ反応しか返ってこないのが「もの」です。その反応の強弱や方向に違いがあったにしても、ほぼ同一の反応が生じます。たとえば、手で触っても足で触っても、起き上がりこぼしの反応は同じです。その場で揺れて、決まった音しか出てきません。

ところが、「ひと」の応答は非常に多様なわけです。言葉による応答、表情による応答、場合によっては抱き上げてあやしかける。そして、その言葉かけ一つを取り上げてみても、その時その時で違います。

そうした「ひと」の応答性の豊かさを、わかりやすく示す例として、イナイ、イナイ、パーを取り上げてみましょう。両手を広げ、「イナイ、イナイ、パー」と一回だけ顔をのぞかせておしまい、ということほとんどありません。何回も繰り返されるはずですが、そして、「イナイ、イナイ、パー」と言うとき、その言い方が少しずつ変化することです。たとえば、最後の「パー」の音程が、高

くなったり、低くなったり、「パッ」と短く言ったり、「パ——」と長く言ってみたりしています。また、手から顔が現われる場所を変化させるかもしれませんし、「イナイ、イナイ、パー」と言っても顔を見せずに、しばらくしてから「パッ」と顔を見せたりもできます。

こうした「繰り返し」と「変化」は、赤ちゃんの関心をよく引き寄せる効果をもっていますが、それはなぜなのでしょう。繰り返される体験からは、赤ちゃんの心に期待感が出現します。「きっとまた出て来るぞ」という気持です。この期待を裏切られない体験が、快の気分、喜びの感情と笑顔とを、赤ちゃんにもたすのだと思います。しかし、いつも同じパターンでは、赤ちゃんもそれに慣れ、やがて飽きてしまいます。そこで、赤ちゃんの関心を引き続けるためには、そのパターンを少しずつ変化させていくことが必要になるのです。赤ちゃんにしてみれば、自分の期待していたものとのこのズレが、そこに驚きを生み、それに伴う喜びの感情が一層高められることになると考えられます。

ここで、赤ちゃんがこうした「ひと」の応答の変化を喜ぶ事実について、もう少し考えておきたいと思います。

応答の変化を喜ぶためには、赤ちゃんの側でどのような条件が必要になるのでしょうか。それを喜ぶためには、赤ちゃんにその変化を処理する能力が必要になると考えられます。一回ごとに変化するものを理解する能力、今処理したものと違うものを即座に処理する能力、ピアジェ流に表現すれば、スキーマを柔軟に調整する能力が必要になるのです。言い換えますと、赤ちゃんには、そういう変化に適応する柔軟性あるいは可塑性が必要なのです。

ですから、こういう能力がない赤ちゃんにとっては、「ひと」からの刺激が大変わずらわしいものになるのではないかという気がするのです。自分が処理しきれない情報をたくさん与える「ひと」を、そうした赤ちゃんが拒否しようとしても不思議ではありません。そういう赤ちゃんにとっては、いつもと同じ応答しか返ってこない「もの」のほうが安心できるのです。ですから、「ひと」の世界を回避し、「もの」の世界にこだわる傾向が強く現わ

れることになるのです。自閉症の子どもたちは、そうした特徴を持っているように思います。

一方、健康な子どもたちの場合には、「ひと」との豊かなそして変化に富む交流をとうして、さきほど申しましたような可塑的な能力がますます育って行くことになるのです。

(3) 伴起的応答の能動性と意図性

応答の能動性ということを考えてみましても、「ひと」と「もの」とは非常に異なります。「もの」というのは、受動的な応答しか致しません。「ひと」は、自分から積極的にかかわろうとする気持を抱えています。また、赤ちゃんの状態を考慮しながらかかわっていけるのが「ひと」であって、これは「もの」にはできません。テレビやラジオも言葉を出しますが、それは子どもの状態とは無関係です。

また、お母さんは常に子どもの発達を望んでいます。赤ちゃんの状態が良くなるようなはたらきかけを致します。ですから、赤ちゃんは快適な状態に一層なりやすい。逆な見方をしますと、であるがゆえに、お母さんは赤ちゃんを不快な状態にさせる力も非常に強いものがあるといえるわけです。

たとえば、こういう実験があります。生後半年ほどの赤ちゃんを、椅子に座らせます。そして、お母さんが自然な振舞いで話しかけをします。赤ちゃんも楽しそうに、声を出したり、笑ったりしています。そのとき、急に、お母さんが話しかけを止め、無表情な顔をしてみせます。すると、赤ちゃんはその表情を大変に不快がります。お母さんからの反応を何とか引き出そうとして、笑ってみせたり、声を出したり、困った表情をしたりして、涙ぐましい努力をします。それでもお母さんが反応をしないで、ジッと赤ちゃんを見つめたまましていると、泣き出してしまいます。非常に強く泣きます。

また、赤ちゃんをあやしていると、赤ちゃんがこちらを見つめるときと、目をそらすときがあることに気づきます。「見つめ合い」と「目そらし」です。赤ちゃんが目をそらしたときに、お母さんがどういふ対応をしたら、また見つめ合いの状態に戻りやすいと思いますか。それは、お母さんが

赤ちゃんへのはたらきかけを手控えるときです。視線を合わせようとして、赤ちゃんの顔を覗きこんだりしないほうがよいようです。それはなぜかといいますと、赤ちゃんは見つめているときに取り入れた情報を、目をそらしたときに処理していると考えられるからです。ですから、そのときに、新たな刺激を与えると情報が過剰になり、ますます赤ちゃんは目をそらしやすくなるのです。

ここで大切なことは、赤ちゃんとの交流をスムーズに運ばせるために必要なことは何かということ。それは、赤ちゃんのリズムを優先することです。赤ちゃんのリズムに大人は合わせられます。しかし、赤ちゃんは大人のリズムにはなかなか合わせられません。合わせようすると、無理が生じます。したがって、赤ちゃんとの関係をうまく作り出すためには、赤ちゃんのレベルにまでこちらが下りていく、赤ちゃんの動きを尊重することが大切になるのです。そうすれば、赤ちゃんのほうでも、そのリズムに合わせられるようになるのです。そこで、やり取りができる。交流が成立していく。そうなりますと、赤ちゃんの側でも、自分のリズムに合わせてくれる大人のほうに、素直に注目しようとする気持が出てきやすくなります。赤ちゃんが、大人を模倣するという形が出現しやすくなるのです。

たとえば、赤ちゃんが「バーバーバー」と喃語を発しているとき、そのとき、お母さんは何をするかといいますと、やはり同じように「バーバーバー」と言うわけです。お母さんのほうが、最初に模倣する。すると、赤ちゃんはもともと「バーバーバー」と言っているわけですから、お母さんの後で「バーバーバー」と言うことになります。結果的に、赤ちゃんもお母さんの音声を模倣したことになるわけです。さきほどのコミュニケーションの基礎のところでは指適をしました、「役割交替」のきっかけを作るのは、お母さんであるということになるのです。

さらに、お母さんの赤ちゃんに対する話しかけを時間分析しますと、興味深い現象があることが知られています。お母さんが赤ちゃんに話しかけをして、その次に話し始めるまでの時間間隔は、ずいぶんゆっくりとした感じがします。実は、その時間間隔は、大人同士がスムーズに会話している

ときの、会話の時間間隔が2回分と、赤ちゃんの平均発声時間がちょうど埋めこまれる時間間隔なのです。お母さんが話し終わる、大人同士の会話の時間間隔をおく、そして赤ちゃんの発声時間をおく、最後に再び大人同士の会話の時間間隔をおく、そういう時間間隔なのです。つまり、お母さんは、話しかけをしない時間に、赤ちゃんが声を出していることを想定するかのようには振舞っているのです。お母さんは、多分、意識してそうしているわけではないと思います。しかし、そこに赤ちゃんのお話しを自分の心の中に組み込みながら話しかけをしている。これも、お母さんが赤ちゃんのレベルにまで下りて話しかけをしている例と考えられます。赤ちゃんとの「役割交替」が、お母さんの心の中で生じているわけです。お母さんは、赤ちゃんが発生できる余地を残しているのだともいえます。何とも、絶妙な仕組みが隠されていることに感心させられます。

(4) 「もの」伴起性を豊かにするために

これまで、「ひと」と「もの」とを比較しながら、「ひと」伴起性の豊かさをお話してきました。それでは、「もの」伴起性を豊かなものにするにはどうすればよいのでしょうか。そのためには、「もの」との関係の中に、「ひと」がかかわってこなければならない。「もの」を操作する楽しみが持続するためには、そこに「ひと」が必要になるのです。子どもたちは、普通、「もの」との関係を「ひと」とのかかわりの中で育てていくのだともいえます。逆に、「ひと」との関係が「もの」とのかかわりの中で育てられるということは、赤ちゃんの場合にはあまりないのではないのでしょうか。

自閉症の子どもたちの大きな特徴は、「もの」との関係の中に、「ひと」とのかかわりを必要としないことです。「もの」との関係の中だけにいます。「もの」を相手に何時間も同じことを繰り返し行なうのです。

「もの」というのは、前にも指摘したように、紋切り型の反応しか返ってきませんから、普通の子どもには飽きやすいのです。しかし、そこに「ひと」の反応が関与すると、「もの」との交流が持続するということがあるのです。たとえば、

ボール転がしの好きな赤ちゃんがいたとします。ボールを繰り返し転がすわけです。ところが、その赤ちゃん、積み木は転がしません。転がして面白がりません。どうしてでしょうか。

その理由の一つは、ボールは転がすのに適した形をしているということです。ボールは転がって行きますが、積み木はボールほど転がりません。転がすという動作になじみやすいのがボールであって、なじみにくいのが積み木であるからだという説明ができます。もう一つの説明は、ボールを転がすと、お母さんはそのボール転がしをほめるということです。そのことを認めて、お母さんも一緒になってボール転がしをしたりするわけです。だから赤ちゃんは、ボール転がしがますます楽しくなるのです。一方、積み木を転がしても、お母さんはその行動を認めません。積み木を転がして、赤ちゃんと一緒に遊ぶお母さんはあまりいないのではないのでしょうか。ですから、積み木転がしは、赤ちゃんにとって面白いものではなくなるのです。このように、「もの」との関係は、そこに「ひと」がどうかかわっていくかによって、非常に大きく異なってくると考えられます。

そして、ここでもう一つ大切なことは、赤ちゃんは「もの」との関係の中に、「ひと」との関係をもち込めるということです。「ひと」との関係の中に、「もの」との関係をもち込む場合もあるでしょう。それはつまり、「ひと」との関係と「もの」との関係という二重の世界を、同時に、巧みにあやつれるという能力があるということを示しています。言葉というものが、現実の世界と言葉という記号の世界の二重世界であることを考えるとき、こうした能力がもつ意味は無視できないように思われます。

以上のように、「ひと」との関係の中で、赤ちゃんは言葉の発達に必要な「情動的交流」「共同注意」「役割交替」を育ててきているのです。それでは、こうした3つの基盤が具体的にいかなる働きを演じることにより、「話し言葉の三角形モデル」が発達していくのでしょうか。次回は、このことについて考えてみたいと思います。

(1990. 3. 23 受理)